

# 大学史編纂課だより

第5号

2013年7月10日 発行

目次	
学祖関連	連載
◇学祖位牌と山田農場…………… 3	◇日大・オリンピック④…………… 4
◇学祖の書簡を入手…………… 6	◇太平洋戦争と学徒④…………… 5



松岡康毅男記念碑

## 松岡康毅生誕の地（徳島県板野郡上板町）

北に讃岐山脈を仰ぎ、南に吉野川を臨む、阿波国板野郡七條村（現徳島県板野郡上板町）。第2代校長・初代総長松岡康毅<sup>まつおかやすこむ</sup>は、弘化3（1846）年にこの地に生まれました。

現在、「松岡康毅屋敷跡」は上板町の文化財に指定され、そこには、昭和18（1943）年9月に松岡康毅先生遺徳顕彰会によって、「松岡康毅<sup>だん</sup>男記念碑」（男＝男爵）が建立されています。碑文の冒頭には、「山沢古<sup>いにしへ</sup>ヨリ人傑<sup>じんけつ</sup>ヲ生ス、人傑ハ徳行ヲ上ト為シ、功業ヲ次ト為ス、二者併セ得テ真<sup>まこと</sup>二千載<sup>せんざい</sup>不朽ト称スヘシ、正二位勲一等男爵<sup>たいどう</sup>退堂<sup>たいどう</sup>松岡康毅先生ハ実ニ其ノ人ナリ」と、司法官・政治家・教育者として多大な功績を残した松岡の人柄が記されています。



屋敷跡の碑

## 松岡康毅の生誕地を調査

まつおかやすこわ  
松岡康毅は、検事総長、農商務大臣、貴族院議員、日本法律学校校長・日本大学総長など、多くの分野で要職を務め、日本の近代化に貢献しています。松岡は、藩閥・政党とは一線を画し自らの力でその地位を築きました。教育においては、徳性の涵養（道徳心を養う）と自主独立を奨励し、多くの有為な人材を育成しています。しかし、このような松岡の事績やその前半生については不明な点が多くあります。そこで、本年2月に出身地である徳島の調査を実施しました。

生誕地である上板町を訪れた際には、歴史民俗資料館の学芸員榎山昌史氏の案内で、「松岡康毅屋敷跡」や道を挟んだ畑の一角にある松岡家の墓地を調査しました。屋敷地は松岡家が上板町に寄付したとのことで、前頁で紹介した「松岡康毅男記念碑」が建立されています。



松岡家墓地

また、歴史民俗資料館には、松岡が揮毫した「苦心未

免容螻蟻…」の掛軸が展示され、松島小学校では、佐々木充昭校長の話が聞かれましたが、校長室に



歴史民俗資料館に展示中の松岡康毅掛軸（左端）

は「一日難再晨」（いちじつ ふたたび あしたなりがたし）の扁額が掛けられていました。ともに来歴は不明とのことですが、「退堂」の雅号が記されています。

次に、徳島県立文書館で松岡家と親戚関係にあった「渡辺家文書」の調査を行いました。同家の文書には、明治初年から20年代の松岡家関係の書簡が含まれており、この時期の動向が分かる資料を得ることができました。

今回の調査では、多くの資料と情報を得ることができました。一方で、松岡の出身地では日本大学との関係を知る人も少なくなっているため、改めて顕彰の必要性を強く感じました。

（小松）

## 戦前の箱根駅伝の定宿 小伊勢屋

日本大学は、箱根駅伝には第3回大会（大正11年）から参加しています。その時の成績は最下位で、しばらくの間成績は振るいませんでした。その後、懸命に練習し実力を身に付け、何回も優勝に手が届くところまで行きながら、その都度チャンスを逸しました。ようやく努力が実り、第16回大会（昭和10年）で悲願の初優勝を手にとると、第19回大会（昭和13年）まで4連覇を成し遂げました。

当時、大会前に選手たちが合宿を行っていたのが、小田原の小伊勢屋でした。昨年12月、小伊勢屋をたずね、現当主（19代）尾崎善久氏にお話を聞くことができました。現在、新しい建物が建てられていますが、古い建物も残されており、選手が過ごした部屋を

調査しました。ここで、幾度も悔し涙を流し、また勝利の栄光を手にしたのかと思うと感慨深いものがありました。



現在も残る当時の建物（2階部分）

なお、戦前の日本大学の箱根駅伝史については、望月和彦氏による『箱根…遙か』が、校友会神奈川支部のHP (<http://nichidai-kanagawa.jp/>) に連載中なので、ご興味のある方は、是非ご覧ください。（小松）

## 学祖事績調査 学祖位牌と山田農場（黒田原調査について）

平成25年1月、栃木県那須郡那須町（黒田原）で学祖山田顕義の位牌と山田農場関係資料について調査しました。学祖の曾孫にあたる山田顕喜元<sup>ひまご</sup>芸術学部教授のご紹介で、位牌が保管されている普門院を訪ねました。普門院は、古くは隣接する福島県白河市にあった曹洞宗の寺院で、明治中期に「開草庵」という出張所を黒田原に設置し、大正期に現在地に移転したとのことです。



普門院の学祖位牌

本堂にある開山廟には、開山和尚と宗祖道元の位牌とともに学祖の位牌が安置されており、「顕忠院 正二位勲一等伯爵 積義宣空齋大居士」と記されていました。3つの位牌は同じ形態であることから、開草庵設置前後に製作されたのではと考えられます。開山和尚や宗祖とともに位牌が祀られていることは、黒田原と学祖の結びつきの強さを物語っているといえましょう。

しかし、ここであらたな疑問が生じました。『山田顕義伝』によると、学祖の戒名（浄土真宗では法名）は「顕忠院殿積義宣空齋大居士」と「院殿号」で記されており、普門院の「院号」で記された位牌とは異なります。『山田顕義伝』は昭和38年刊行で、編纂にあたり底本とした資料は山田家に伝わっていた『山田顕義伯伝』という和綴りの資料です。学祖の親戚で維新史に造詣が深い村田峰次郎が編纂した資料ですが、この資料も院殿号で記されています。一方で、学祖の葬儀翌日の明治25（1892）年11月18日付の新聞記事では、今回普門院で確認できた院号（顕忠院積義宣空齋

大居士）が紹介されています。

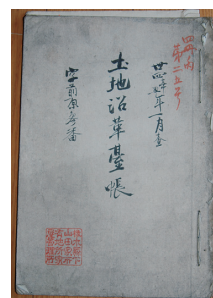
学祖の法名が不分明な要因としては、葬儀の経緯も少なからず関係しています。学祖の葬儀は、真言宗豊山派の護国寺で執り行われましたが、法名は浄土真宗西本願寺21世の大谷光尊が入棺式の折に命名しました。また、学祖の葬儀が仏式だったことについては問い合わせが多かったようで、11月19日付の東京朝日新聞に山田久雄以下親族一同の「謹告」が掲載されています。これによると、生前、学祖は皇典講究に尽力しましたが、葬祭に関しては何も言い残しておらず、祖先以来の家制に従うとともに、母の意向で仏式としたと記されています。

このように、墓所のある護国寺で付された戒名ではないため、護国寺にも記録が無く、山田家が戦災で資料が多く焼失しているため、これまで学祖の法名については確かな資料がありませんでした。今回、普門院で位牌が確認されたことによって、あらためて学祖の法名について検証する必要性が出てきました。今後、継続的に調査を進めていきたいと思えます。

また、黒田原の山田資料館に保管されている山田農場関係資料についても調査しました。「書類 山田家黒田原農場」と書かれた筆筒の中には、明治34（1901）年作成の「土地沿革台帳」が保管されていました。

この資料に記載されている最も古い記述を見ると、山田家は黒田原の土地について、明治21年に拝借願を提出し、明治26年に払下げを受けています。山田農場のすべての土地が記載されているわけではないのですが、これによって、学祖生前に黒田原の官有地を借り受け、死後に山田家が土地の払下げを受けていたことがわかりました。

今回山田資料館で調査した資料をもとに、学祖の農場取得経緯などについてさらに詳しく調査していきたいと思えます。（松原）



山田資料館の土地沿革台帳

## 連載 日大・オリンピック④

第16回オリンピック競技大会は、昭和31（1956）年11月22日～12月8日まで、オーストラリアのメルボルンで開催されました。南半球で行われた初めての夏季オリンピックでした。

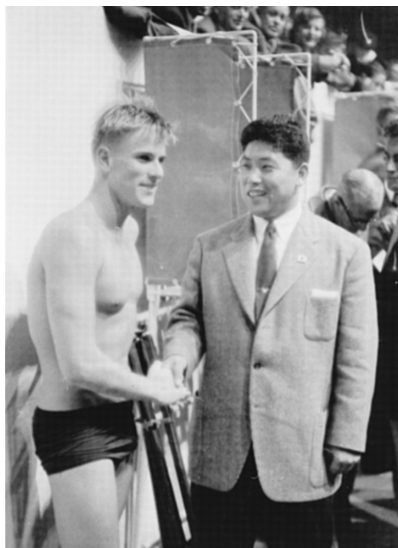
この大会では、別表の日本選手メダリストで分かるように、小野喬選手をはじめとした体操競技が大きく飛躍してメダルを獲得し、世界の注目を集めました。

一方、わが日大勢は、「水泳日大」の復活こそが「水泳日本の復活」につながると、オリンピック大会に向け日々奮闘していたのです。

昭和30年、水泳部は、3大学（日大・立大・明大）対抗で古川（平泳ぎ）が世界最高記録を出す活躍で勝利するシーズン幕開けとなり、日本選手権でも鈴木・大野・石本・古川などが優勝、第3回日米対抗でも古川が世界新記録を出す活躍で日本を勝利に導きました。そして、最大の目標であった全日本学生選手権、今年こそは早大から天皇杯を「日大に！」に燃えて臨み、古川・石本が日本記録を更新する泳ぎを見せましたが、総合でまたしても早大に敗れてしまったのです。

この悔しさがバネになったのでしょうか、『日本大学新聞』第550号にこんな記事があります。「四つの世界新出す 水泳 世界記録に挑む会開く」。この年10月、水泳部は小雨降るなか、都立富士高校プールで「世界記録に挑む会」を開催、古川・吉村が220ヤード（200m）平泳ぎで世界最高、古川は110ヤード（100m）でも世界最高、石本が220ヤードバタフライで世界最高、そのほか鈴木・後藤も日本新記録を出したというのです。

こうした努力・健闘の結果、翌31年の全日本学生選手権では、6年ぶりに早稲田大学から天皇杯を奪取しました。のみならず、日本大学から、青木行義（経済学部商学科4年）・八木清三郎（歯学部1年）・古川勝（経済学部



ローズ選手と古橋

地元オーストラリアのマレー・ローズは、自由形400・1500m及び800mリレーの3種目で金メダルを獲得したが、大会時17歳で史上最年少記録であった。次のローマ大会でも3個のメダルをとり「史上最高のスイマー」と呼ばれた。

経済学科3年）・吉村昌弘（経済学部経済学科2年）・石本隆（経済学部経済学科3年）、OBから自由形鈴木弘、飛び込み馬淵良がメルボルンオリンピック水泳競技の代表に選出されたのです。また、卒業後、大同毛織に就職し、オーストラリアへビジネス留学の経験がある古橋廣之進が、水泳チームのマネジャーとして参加することになりました。

メルボルン大会の水泳競技では、地元オーストラリアが活躍し、13種目中8種目で優勝して世界をアッと言わせました。わが水泳陣は、日本独特の潜水泳法【潜水泳法は翌年から禁止となった】を身につけた古川・吉村の力泳により平泳ぎ200mの1位・2位を占めて面目を保ち、ベルリン大会以来、20年ぶりに君が代が流れたのです。なお、世界新記録を塗り替え続けた古川は、世界のアマチュア・スポーツ選手を表彰するヘルメス賞（1956年度）を受賞しています。

また、第11回毎日マラソン（31年5月大阪、メルボルン大会代表選手最終選考大会）に出場してみごと優勝を果たし、オリンピック代表選手に選ばれた川島義明（33年度卒業）が、本大会不振の陸上競技の中にあつて5位に入賞しています。（文中敬称略）

（田淵）

日本選手メダリスト（ゴシック日大選手）

金	古川勝	男子200m平泳ぎ
	小野喬	体操男子鉄棒
	池田三男	レスリング（ウエルター級）
	笠原正三	レスリング（フェザー級）
銀	笠原茂	レスリング（ライト級）
	山中毅	男子400m自由形
	山中毅	男子1500m自由形
	吉村昌弘	男子200m平泳ぎ
	石本隆	男子200mバタフライ
	久保田正躬	体操男子平行棒
	小野喬	体操男子あん馬
	小野喬	体操男子個人総合
	相原信行	体操男子徒手
銅	相原信行・小野喬 久保田正躬・河野昭 竹本正男・塚脇伸作	体操男子団体総合
	久保田正躬	体操男子つり輪
	竹本正男	体操男子つり輪
	竹本正男	体操男子鉄棒
	竹本正男	体操男子平行棒
	小野喬	体操男子平行棒

## 証文 太平洋戦争と学徒④

今年、昭和18（1943）年10月21日に、神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会が催されて70年になります。

壮行会参加者を含め、学徒兵として海軍予備士官となった者たちの中には、慶応大学野球部の別当薫（後に阪神・毎日）など学生スポーツの選手として活躍した者も大勢いました。第3期兵科予備学生の先任分隊監事、第4期の第1大隊長であった日比野寛三海軍中佐は、前線指揮官に必要な能力として、体力・知力と共に運動神経を重視した結果ではないかと述べています（津村敏行『あゝ海軍予備学生』）。



東京ドームの敷地に建つ  
「プロ野球関係戦没者鎮魂の碑」  
遺族代表は石丸進一の兄藤吉

兵科の日本大学出身者では、柔道の馬場忠道（3期）・石岡貢（4期）、相撲の平田信一（3期）、ヨットの豊島邦太（4期）・野口颯（5期）らがいました。また、飛行専修予備学生にはレスリングの島谷一二三（13期・戦没）や、陸上選手で戦時中最後の箱根駅伝を走った成田静司（14期）の名もありました。

学生スポーツばかりではなく、日本大学に在籍しながらプロ野球の投手として活躍していた石丸進一（14期・戦没）も戦場に身を置くこととなります。石丸は、昭和16年に兄藤吉のいる名古屋軍（現 中日ドラゴンズ）に入り、出陣学徒壮行会の9日前、18年10月12日の対大和軍戦でノーヒットノーランを成し遂げました。

予備学生となり操縦訓練を受ける中、同期で法政大学野球部の名一塁手本田耕一（日本大学第三中学校出身）と親しくなり、基地の野球試合ではバッテリーを組んで連戦連勝でした。特別攻撃隊を志願した2人は昭和20年5月、鹿児島県鹿屋基地にいました。10日、出撃が決まった石丸は、宿舎となっていた野里国民学校の校庭で本田を相手に最後のキャッチ・ボールを行い、翌11日に飛び立ちました。本田もまた、14日に出撃して行きました。

（高橋）

## 寄贈資料 昭和初期の卓球部関係資料

平成24年10月、芸術学部OBの山崎好一氏から父である実氏の日本大学関係資料が



寄贈資料の一部

寄贈されました。内容は、「昭和8年度商学部卒業記念写真帳」「卓球部関係メダル」8点「卓球リーグ戦日割表」4点の原資料13点に加えて、学生時代の複製写真14点です。

山崎実氏は、昭和9（1934）年に商学部商業学科を卒業。在学中は卓球部に在籍していました。日本大学卓球部は、大正15（1926）年に創部。彼が学部生だった昭和6年～9年頃には、男子シングルスで活躍する山田孝次郎を擁し、団体でも、リーグ戦や全日本大学対抗卓球大会で上位の成績を占めていました。

（高橋）



山崎実氏  
「昭和8年度商学部  
卒業記念写真帳」

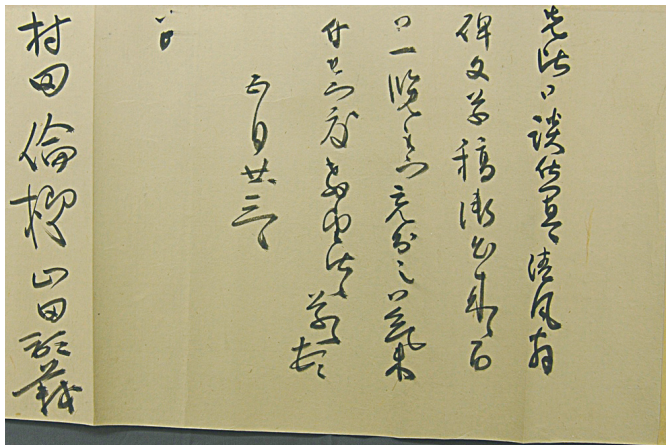
## 学祖の書簡を入手

昨年秋、学祖山田顕義の書簡が含まれている卷子2点を入手しました。それぞれ「芳勲帖」「新挹采帖」と外題に記されていて、題字は児玉少介が書いています。児玉は長州藩出身で、内務省や工部省に勤め、後に元老院議官、貴族院議員となった人物です。学祖とは漢詩を通じての交流が多かったようで、今回の書簡にも漢詩が記されています。

この卷子には、木戸孝允、伊藤博文、井上馨、山県有朋などの著名な人物の書簡50点が収められていますが、そのうちの9点が学祖の書簡です。書簡の宛名には「児玉少介」と「村上



入手した「新挹采帖」



村田清風の碑文に関する学祖書簡  
(宛名に「村田倫」とあるが「村上」の誤り)

倫」が多いので、恐らく児玉家と村上家に伝わっていた資料を巻物にして保管したと考えられます。村上倫とは、萩藩の支藩である清末藩出身で、明倫館で学び、第二次長州征伐時は石州口で戦功を挙げた人物で、明治22（1889）年49歳で死去しています。学祖の書簡は明治以降に作成されたもので、村田清風の碑文草稿や自作の漢詩、短歌などが記されており、明治期における学祖の文化的交流を知り得る貴重な資料といえます。

(松原)

## 第4回プレミアム・カレッジ「元氣・勇気・笑顔～福島に笑顔を～」

平成24年10月20日（土）、郡山市の工学部70号館を会場に第4回プレミアム・カレッジが開催されました。

日本大学出身のお笑い芸人テツandトモ、クワバタオハラ、たんぼぼの皆さんによる元氣の出るお笑い、そして俳優森本レオさん



による朗読とトーク、元氣いっぱいエンターテイメントでした。



大学史編纂課では、会場のロビーで学祖山田顕義の事績を中心とした展示を行い、来場の皆さんに、日本大学の歴史に触れていただきました。

## 企画展 大学の創設と萩の先人たち（萩図書館）



日本大学と山田顕義を紹介するコーナー

義を中心に」と題した講演を当課の松原が担当しました。当日は90名ほどの方が来場し、本学校友の方もご参加いただきました。学祖の故郷で山田顕義への理解を少しでも深めることができたならば幸いです。貴重な機会をいただきました萩図書館関係者の皆様に御礼申し上げます。

平成25年3月2日～17日まで、山口県の萩市立萩図書館で「大学の創設と萩の先人たち」という企画展が開催され、その中で日本大学学祖の山田顕義も取り上げられました。萩市はこれまで数多くの大学創立者を輩出しており、今回は13大学について、萩市ゆかりの人物と関連する萩図書館所蔵図書が展示されました。

また、関連イベントとして、2月16日に同図書館で「明治期の高等教育と萩ゆかりの人々—山田顕



萩市立萩図書館企画展  
「大学の創設と萩の先人たち」

## 全国大学史資料協議会2012年度総会ならびに全国研究会



全国研究会 総括討論

平成24年10月10日～12日、京都府の同志社大学今出川キャンパスで全国研究会が開催されました。露口卓也同志社大学文学部教授（同志社社史資料センター所長）の「八重という女性—その生き方—」と題した記念講演は、平成25年大河ドラマ主人公である新島八重に関するもので、参加者も多く関心の高さがうかがえました。

全国研究会は「大学アーカイヴズの社会貢献」のテーマで3名の報告があり、その後、総括討論が

行なわれました。大学アーカイヴズの社会貢献として地域連携イベントやレファレンスなどの業務を進めていくためにも、所蔵資料の整理という日常の業務があらためて重要であることを再認識しました。

見学会では、新島旧邸、裏千家茶道資料館を見学しましたが、研究会の合間に同志社大学内の建築物や資料保存施設なども見学させていただきました。敷地内の5つの建造物が重要文化財というキャンパスでしたが、古い建物の景観を壊さないように配慮したキャンパス整備が印象的でした。

運営にあたった西日本部会役員の皆様、そして会場校の同志社大学の皆様に御礼を申し上げます。



クラーク記念館  
(同志社大学内)

